
運命の悪戯

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命の悪戯

【Nコード】

N2824G

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

画家になりそこねた男。その彼がある小さな政党に入りたまま演説の代打を頼まれた。するとそこから。歴史は時として思わぬ場で思わぬ人間をこの世に送り出します。

第一章

運命の悪戯

外見はそれ程悪くはない。かといっていいわけでもない。

黒い髪に青い目をしている。背はまあ普通位だ。体格は長い間軍にいたわりには細くそのせいで小柄にも見えるが実際は決して低くはなかった。

ただ眼光が異様に鋭い。小さくした髭のせいであまり目立たないが実に鋭い目だった。だがあえて目立つといえればそれだけで他はこれといって目立つ外見の男ではなかった。

「何でも美術大学に落ち続けたらしいな」

「そんなの誰でもだろ。よくある話だ」

そしてこのことも周りから見ればこんなふうだった。本当に誰から見てもごく普通の平凡な男であった。

だが彼はとある政党に入った。その政党は党员といっても本当に数人しかいないごく小さなものであった。この御時世に雨後の筍の如く出て来た社会主義的な政策を掲げる政党の一つだった。

「我々の社会主義は他の社会主義とは違う」

この主張もよくある主張であり斬新なものもない。

「国家主導の社会主義だ」

国家主導でない社会主義もまあないのでやはり斬新でもない。社会主義とは必然的に大きな政府でなければならずそれが為に国家主導になってしまうものだからだ。

だが彼はとりあえずその政党に入った。これが紛れもない事実であつた。最初はそれだけだった。

ところがある日のことだった。この政党が街頭演説を行うつもりでその演説するメンバーも決めていた。そのメンバーが急に出られなくなってしまったのだ。

「彼は無理か？」

「ああ、無理だ」

「どうしても外せなくなったらしい」

「参ったな」

みすばらしい地下室に置かれた党の本部の薄暗い灯りの中で顔を見合わせて深刻な話になっていた。皆頭を抱えてしまっている。

「折角街頭演説ができるまでになったのにな」

「だが。彼は無理になった」

「どうする？」

「中止にするか？」

「いや、それは駄目だ」

中止の考えはすぐに否定された。

「それは。折角ここまでこぎつけたんだぞ」

「そうだな。それは絶対にやらないといけない」

「我々の偉大な政策を知らしめる第一歩だからな」

「しかしだ」

彼等の中の一人が言った。

「彼に任せていいのだろうか」

「彼にか」

「不安だ」

こう言うのである。

「やはりな。それは」

「ううむ、言われてみれば」

「それはあるな」

この不安が出されると多くのメンバーもそのことについて考えざるを得なかった。何人かは実際に腕を組んで俯きだしたのであった。

「新入りだしな」

「しかもだ。話すのが上手いとは思えない」

「確かにな」

次々と意見が出るのだった。

「やはりそれを考えると彼では」

「荷が重いか」

「いや、それでも彼しかないぞ」

また意見が出された。今度はいささか現実的な意見であった。

「やはり。今動けるのは」

「仕方ないか」

「そうだ。何を言っても我々はまだ人がいない」

人どころか金も力もない。泡沫政党にはよくあることだ。

「だからだ。ここは何があっても挽回できるようにしておいてな」

「今は彼に任せるか」

「そういうことだ」

結局のところこれしかないのであった。今の彼等には。

「彼に行ってもらおう。いいな」

「そうだな。やはりそれしかないな」

「それならな」

こうして演説には彼が代わりに行くことになった。党員達はその彼を表面上は恭しく演説に行かせるのだった。その考えはあえて隠して。

「では頼むぞ」

「君の力を頼りにしている」

「わかった」

わかったと答えながらも彼にも然程自信があるようには見えなかった。軍隊で勲章を手に入れ優秀な下士官として評価されていたらしくある程度は自信らしきものは感じられないでもなかった。だがそれでも自信満々の英気溢れる人物には到底見えはしなかった。

第二章

「では。やってみよう」

「頼んだよ」

「ではな」

こうして彼を演説に行かせたのだった。演説の場はそもそも泡沫政党に対して誰も期待していないのか群衆もまばらだった。彼はそこに立つたのである。

「まあこの程度の数ならな」

「失敗しても挽回がきくな」

「そうだな」

群衆の少なさにかえって安堵する程であった。党員達は場を建物の陰から覗き込んでいた。彼は既に演説の壇の上に立つてはいた。

「何があつてもな」

「まずはよしとしよう」

とりあえず演説が成功するとは思っていなかった。群衆達にしるそれは同じである。欠伸をする者もいればなけなしのパンをかじりだしている者もいる。その中で彼は壇に立っていたのだ。

そしてその彼が口を開いた。その言葉は。

「諸君！」

いきなり力強い動作と身振り手振りであった。

「私が政治家になろうと決意した時！」

「むっ!？」

「おやつ!？」

まずは群衆のうちの何人かが声をあげた。

「この国はドン底にあった！」

こう言うのである。

「これは先の敗戦によってだ！」

誰でも知っていることが述べられた。

「だが我々は敗れたのか！」

群衆に対して問うていた。党員達はそれを見て怪訝な顔になる。

「何かおかしいな雰囲気だな」

「そうだな」

その建物の陰で顔を見合わせて言い合っていた。

「どうにもこうにもな」

「何か変わったか？」

「我々は敗れたのか。否！」

それを否定するのだった。

「我々は敗れたのではない！敗れた原因は他にある！」

いきなり糾弾すべき対象を指し示すのだった。

「それはあの者達だ。あの忌まわしい星を紋章に持つ者達だ」

「星の紋章という」と

「あの連中のことだな」

「ああ。間違いないな」

「そうだな」

党員達も群衆達も彼の言葉を聞いて顔を見合わせて言い合い確かめ合う。考えられる存在は彼等しかなかったのだった。

「あの者達が我々を後ろから撃ったのだ」

「我々を」

「後ろから」

「そうだ」

既に何人かは彼の言葉を復唱しだしていた。

「あの者達に後ろから撃たれ我々は敗れた。だが！」

ここでまた叫ぶのであった。

「我々はこの裏切りを忘れない。そして恥もだ！」

「恥も！？」

「それは」

「何を塞ぎ込む理由がある！」

また激しい身振り手振りと共に言葉になっていた。

「我々は誇り高き存在だ」

「誇り高き!？」

「我々が」

「思い出してみればいい」

ここで彼は己の胸に手を当てて考える動作を試みせた。まるで他の者達にもそうすることを強いるかのように。

「我々は。周りに敵を抱え敗れはしなかったのだ」

「敗れはしなかった」

「戦場では敗れてはいなかった」

「こう言うのである。」

「あの裏切り者達に後ろから撃たれたただでだ」

「そうだな。そうだ」

「我々は勝っていた」

また何人かが言い出した。それは党員達も同じだった。

「そつえばそうだったな」

「ああ。俺達は負けてはいなかった」

実際に彼等のうちのかなりの割合が戦争に参加していた。だからこそ戦場がどういった状況だったのかよくわかっていた。肌で感じられる言葉だったのだ。

「私もまた同じだ」

自分も彼等と同じだと宣言した。

「戦場で常に勇敢に戦い敵を倒してきた」

「戦場で!？」

「しかも勇敢にか」

群衆達はそこに注目した。

「戦ってきた。ドイツの為に」

「んっ!？待てよ」

「おかしいぞ」

だがここで党員達は気付いたことがあった。それは。

第三章

「彼はドイツ生まれではなかったな」

「そうだ」

それを言うのであった。

「オーストリア生まれだ」

「そうだったな」

実はそうであつたのだ。彼は今いるドイツに生まれたのではなく、
つたのだ。オーストリア出身だつたのだ。ゲルマン民族ではあつて
もドイツ生まれではないのだ。

「それでどうしてドイツにそこまで」

「おかしいな」

「この母なるドイツの為に」

「母なるドイツの為に」

「戦つてくれたのか」

「だが。ドイツは今この惨状にある」

彼はそれを心から嘆いていた。

「何もかもが奪われ不幸に覆われたこの惨状にあるのだ」

「しかしそれは救われる」

彼は断言してみせた。

「国家社会主義により。必ずや蘇るであらう！」

「蘇る！？」

「今のドイツが」

「敵を倒す！」

今度は敵を出してみせた。

「我が偉大なるゲルマンの敵を倒し！そして！」

「そして！？」

「偉大なる母なるドイツを蘇らせるのだ！この手で！」

「そうだ、俺達は偉大なんだ」

「負けてはいないんだ」

彼等も今それを心の中で確かなものに感じだしていた。

「だから必ず」

「もう一度」

「諸君、戦いの時ははじまった！」

彼の鼓舞は続く。

「忌まわしきこの惨状を脱し敵を一人残らず倒す！」

「敵を！」

「俺達の敵を！」

「偉大なる国家社会主義の為に！今私はその先頭に立った！」

激しい身振りがさらに増す。

「私はその為に幸福もしなければ敗北もしない！」

「そうだ、やってくれ！」

「貴方が！」

彼の演説は万雷の拍手により終わった。気付けば群衆達は最初よりもその数を遥かに増やしていた。その拍手と歓声の中で彼は誇らしげに胸を張っていた。

「おい、嘘だろう？」

「こんなことが」

党员達もその拍手と歓声を聞いて目を丸くさせていた。

「成功したなんて」

「いや、成功どころじゃない」

「こう言い合うのだった。」

「大成功だ」

「そうだな。思いも寄らないな」

「それにだ」

彼はさらに言うのだった。

「彼は凄いぞ」

「そうだな」

顔を見合わせて言い合っていた。

「彼ならやれるぞ」

「そうだ、ドイツを救える」

「この国を」

今それを確信したのだった。

「英雄だ」

「英雄が出て来た」

言いながらゴクリと唾を飲み込んだ。

「遂にだ。我々の為に」

「国家社会主義、そして」

彼等は言う。

「ドイツの為に」

「成し遂げてくれる」

これがはじまりであった。ドイツ第三帝国總統にして稀代の独裁者アドルフ・ヒトラーのはじまりであった。ほんの数人しかいなかったドイツ国家社会主義労働者党はヒトラーの類稀なるカリスマと指導力により忽ちのうちに勢力を伸ばし遂にはドイツを掌握し全体主義国家を作り上げた。そのはじまりはこの演説であった。若し彼がナチスにおらずここで演説しなかったらどうなっていたかそれはわからない。だが歴史はこのことだけを書き残している。この時からヒトラーは世に出て来たのだと。そのことだけを書き残しているのである。

運命の悪戯

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2824g/>

運命の悪戯

2010年10月8日15時54分発行